

# 古典の授業体系について

国語科 高瀬 允  
鉄 車 佳 司  
松 田 章 一

## はじめに

昭和48年度以後改訂実施される高等学校の教育課程は、戦後の急速な社会変遷に伴って何度か実施改訂された教育課程の中でも、もっとも大きな変革と言わねばならないだろう。高度成長した社会との中で急速に進歩した日本国の国力認識、そして教育を受けようとするもの増大は、日本という国に適合した教育を志向しようとしている。教育制度そのものの検討、——いわゆる先導的思考はその現われであろう。アメリカによって指導された戦後文化から脱皮して独自の文化を生み出そうとする日本人の知恵である。このようなブームメントは経済的に高度成長を遂げた日本人の自負であろうが、一体どこまで広がって行くものかはかり知れない。

大きな母国の再認識というべきなのであろうか。

さて、このような母国再発見 *Discorer Japan* の思想は、国語教育の中に強く表われて来る。即ち古典の再発見であり、古典教育を重視しようとする動きである。今度の教育課程の改訂の中では、このことはまことに強く反映しているといわなければならない。したがって、われわれ国語教育を担当するものにとっては、歓迎すべきことといわねばならないが、それと同時に、自国を強調するあまりに、戦前の国粹主義の横行する世に移行することがないように気をつけたいものである。真に古典を愛する心を養い、自国の文化遺産に謙虚に眼を向ける態度を互いに身につけたいものである。古典教育を強化するということが即国粹主義に繋がるというような極端かつ単純な思考はこれこそ妙ちきりんなものといわなければならないが、心しなければならぬと思う。古典ではないが、現代国語教科書で、戦争体験が教材として採択されるという事（筑摩「戦艦大和の最後」）についても、その賛美にならなければと願うものである。

古典教材、漢文教材が重視されるのは高等学校ばかりでなく、中学校にまで及ぶ。高等学校の古典の体系を考えるには、まず、この中学校の教育課程を知って置かなければならないであろう。

## 1 中学校に於ける古典はどのように扱われるか

来年より実施される中学校指導要領は、昭和43年6月教育課程審議会答申「中学校教育課程の改善について」を基本方針として編集されたもので、「調和と統一のある教育課程の編成」「指導内容を基本的事項に精選・集約する」「生徒の個性能力、特性に応ずる教育の徹底」などを具体化したのである。今ここでは、古典の体系を問題にするのであるから、古典に関連すると思われる部分のみを見てみよう。

中学校では、古典は、いわゆる「読むこと」の指導の中に含まれるものである。

昭和33年3月発表の指導要領と比較してみよう。

昭和33年3月発表	昭和44年発表
古典については、基本的なものに適宜触れさせ、古典に対する関心をもたせるように留意することとしている。	教材の中に古典を含めることとし、古典に対する関心を深め、古典として価値のある古文と漢文とを理解するための基礎を養うようにすることとしている。

改訂前では、「古典に関心をもたせるように留意する」だけであったのが、改訂によって、「関心を深め」「古典としての価値ある古文と漢文とを理解するための基礎を養う」という風になった。このことは、従来、わずかであった古文教材も増し、ほとんど触れられなかった漢文教材も顔を出し、古文理解の基礎となる「ことばのきまり」（平易な文法）も教科書中に加わることになったことを意味する。どのような教材が採択されているか、実際に中学校の教科書にとり挙げられている古典教材を例示してみよう。

書店	学 年	1 年	2 年	3 年
東京書籍		単元5 昔のことば ・昔の童話 ・昔のかなづかいとことばづかい 竹取物語	単元5 古典を読む ・鷹の虫—花月草紙 ・うひやまぶみ ・孔子のことば—論語 （書き下し文訳文対比） 単元13 古典に親しむ ・つれづれ草 ・扇の的—平家物語 単元16 狂言を楽しむ ・清水	単元5 古典のしらべ ・天の香具山—万葉集、古今集、新古今集、金槐集、山家集 ・芭蕉と蕪村—奥の細道 ・漢詩—遊—洞庭—春望 単元13 古典を味わう ・東下り—伊勢物語 ・枕草子
日本書籍		単元14 古典にふれる ・古典を読む ・倒れたところで土つかめ—今昔物語 （訳文） ・児のかいもちひするに空寝したる事—宇治拾遺物語から（原文、訳文対比） ・中国の昔話—推敲、待ちぼうけ （書き改めた文章）	単元6 古典に親しむ —戦記と狂言を読む ・もののふの心 ・敦盛の最期 ・四面楚歌 ・柿山伏 単元13 古典に思う —随筆を読む ・枕草子（3段） ・徒然草（3段） ・わたしたちと古典—秋山虔	単元9 古典を味わう —和歌、俳句を読む ・万葉集8首、古今集6首、新古今集5首 ・芭蕉、蕪村、一茶 ・平泉—おくの細道 単元14 東洋の心 —中国の古典を読む ・論語（解説文） ・孔子のことば ・唐詩
光村図書		単元七 古典への道 —昔の文章を読む (一) 四季おりおり ・日本人の季節感—石森延男 ・雪とけて—一茶、良寛 (二) 琵琶の名人（訳文） (三) 柿山伏	単元七 古典との対話 —古典の心に触れる (一) 日本の古典（文学史） (二) 足ずり （原文、訳文対比） (三) 堀池の僧正 (四) 中国の名言	単元七 古典の世界 —古典に親しむ (一) 日本の美の伝統—池田亀鑑 (二) うつくしきもの—枕草子 (三) さわらび—万葉集 (四) 唐詩鑑賞

教育出版	単元七 古典の世界 ・古典を学ぶということ ・敦盛の最期 (原文, 訳文対比) ・一茶と良寛 ・故事物語	単元七 古典の世界 ・徒然草 ・しびり—狂言 ・孔子のこことば	単元七 古典の世界 ・枕草子 ・源氏物語について (解説文) ・唐詩 ・桃花源—山本和夫訳
学校図書 株式会社	単元8 古典 ・ししに乗ったきつね —今昔物語 (訳文と原文の混交) ・小判十両—久保田万太郎 (西鶴諸国咄より) ・雨やどり—川柳	単元8 古典 ・夢窓の鯉魚 —(雨月物語)石川淳 ・扇の的一円地文子 (一部原文) ・鬼清水—狂言記より	単元5 古典(←) ・和歌の世界 —久松潜— ・奥の細道—加藤楳邨 ・江は碧にして —吉川幸次郎 単元8 古典(⇒) ・紫式部と清少納言 —池田亀鑑 ・柑子の木, 水飴 —徒然草, 沙石集 ・朋遠方より来たる —中沢希男

以上数社の教科書に採択された古典教材の取り上げる態度について、指導要領を見ると次のようになっている。

第8の4の(3)

「その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、短くてやさしい文語文や・格言・故事成語および基本的な古典を適宜用いるようにすること、その際、原文は親しみやすく平易なものを選ぶようにし、それをよく理解させるために現代語訳や注釈をつけ、漢文においては書き下し文を併用するなどくふうするようにすること。文語や訓点のきまりについては、教材を読むのに必要があれば触れる程度にとどめる。」

各社は、それぞれ有名な原典から取材して、苦心して平易に、興味を抱くようにと工夫しているが、やはりかなり古典教材の濃度が高まっていることは確かで、中学校の全生徒がこれを理解できるとは思われない。しかし、ともあれ、高等学校へ入学してくる生徒は、かなりの程度の古典を学習して来ることにはまちがいはない。

中学校において、以上のような階程を経た、高等学校の古典学習は、どのようになるであろうか。以下、高等学校学習指導要領を見ながら考えて行こう。

## 2 高等学校における古典はどのように扱われるのか——特に古典Ⅰ甲と古典Ⅰ乙を中心に

まず改訂指導要領の中に、高等学校における古典学習の方向を見るのが適當である。

### 1) 古典甲 がなくなった。

昭和38年度の高等学校教育課程の中では、古典甲を設けて、目標として、(1) 古典の意義を理解し、古典に親しむ態度を養う。(2) 概観的な理解を得させ、読解し鑑賞する能力を養い、思考力、批判力を伸ばし、心情を豊かにすることを上げているが、既に見て来たように、新課程による中学校段階においてかなりの古典学習をしているという条件を考慮すれば、浅すぎるの感は深い。当然、もう一步深めた内容が要求されて来る。その要求に答えたのが

古典Ⅰ  $\begin{matrix} \text{甲} \\ \text{乙} \end{matrix}$  → 古典Ⅱ という体系である。

古典Ⅰの中に甲、乙の二種が生まれたわけであるが、それではこの両者には一体どのような差異があるのか。

## 2) 古典Ⅰの中の甲、乙はどう違うか

### 1 目標の差異

	I 甲	I 乙
目標	(1) I乙目標(1)に同じ	(1)
目標	(2) 古典としての古文と漢文の基本的な作品を読んで、古典を読解し鑑賞する基礎的な能力を養い、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。	(2) 古典としての古文を読解し鑑賞する能力を養い、思考力・批判力を伸ばし心情を豊かにするとともに、読むことを通じて、 <u>作品と時代や文化との関係などがわかるようにする。</u> (3) 古典としての漢文を読解し鑑賞する能力を養い、思考力・鑑賞力を伸ばし、心情を豊かにするとともに、 <u>わが国の言語、文学、思想などと関係の深い漢文を読むことを通して、そこに盛られている文化の特質や、わが国の文化との関係などがわかるようにする。</u>
	(3) I乙目標(4)に同じ。	(4)

上記表に示したごとく古典Ⅰ甲は基礎的な学習を基本として、古典に親しむことを主旨としているのに対して、古典Ⅰ乙は、目標(2)(3)として古文と漢文の学習を独立目標としておき鑑賞の能力にまで古典学習を発展させようとしている。また、文化史的学習の面も古典Ⅰ甲よりは強化されている。このことは、学習指導要領の 2.内容 及び 3.内容の取り扱い の項を比較して見ればわかる。以下表にまとめて見よう。

### 2 内容の差異

	I 甲	I 乙	
		古 文	漢 文
(1) 指導事項	ア 大意やあらすじをつかむ イ 文章に即して主題や要旨をつかむ	ア } 左に同じ イ }	ア } 左に同じ イ }
	ウ 古文特有の語句の意味の用法を文脈の中でとらえる	ウ 語句や文の意味を文脈の中でとらえる。 エ 古文特有の主要な語句の意味、用法を理解する。 オ 文の構造や文章の構成を理解する。 カ 作品に描かれた情景や人物を豊かな想像力をもってとらえる。	

	エ 漢文の基本的な語句、文の構造および訓読のきまりを理解する。		ウ 漢文の訓読のきまりを理解する。 エ 読解に即して、基本的な語句の意味、 <u>用法</u> 、構造を理解する。 オ 基本的な文の構造を理解する。
	オ 作品に現われたものの見方、感じ方、考え方を <u>読み味わうこと。</u>	キ 作品に現われた <u>自然、人生、社会などに対する思想や感情をとらえもの</u> の見方、感じ方、考え方を深めること。	カ 左のキに同じ。
	カ 作品の表現上の特色を理解し、すぐれた表現を味わう	ク 左のカに同じ	キ 左のクに同じ
	キ 朗読を通して、作品の読解鑑賞を深める。	ケ 左のキに同じ	ク 左のケに同じ
	ク 漢字、漢語に対する知識を高め、国語の理解や表現に役だたせること。		ケ I 甲欄のクに同じ
(2) 読む作品の対象	古文 ア 和歌、俳句類 イ 物語類 ウ 随筆・評論類 漢文 ア 経子類 イ 史伝類 ウ 詩文類	ア } 左に同じ イ } ウ } エ 戯曲類	ア } イ } I 甲漢文アイウに同じ ウ }

### 3 内容の取り扱いの差異

	I 甲	I 乙
(1) 内容の取り扱い	ア 古文と漢文の学習は一方だけにかたよらない イ 古典として基本的で価値が高いものを精選 ウ 古文は読みやすいようにくふうし、注釈や解説や現代語訳などを適切に用い 漢文は、訓点をつけ、教材によっては書き下し文を併用	ア 標準単位数で履修させる場合は、古文と漢文の授業時数の比は <u>3対2</u> イ 古典としての価値が高いもの、を精選 ウ 古文では現代語訳を用いない 漢文は書き下し文は用いない
(2) 内容の指導上の配慮	ア 文語文法の指導は、作品の読解に即して行なう程度 イ 漢文で <u>漢字学習が負担にならないように。</u>	ア 能力を越えて専門的な指導をしない。 イ <u>文学史、国語の変遷などに関する指導は、作品の読解鑑賞に即して行なう。</u> ウ 文語文法の指導は、作品の読解に即して行ない、 <u>必要に応じてはまとまった学習もできるようにする。</u> エ 訓読は文語文法との関連に注意

<p>訓読は文語文法との関連に注意 ウ 漢文とわが国の言語、文学、思想などとの関係にも触れる。</p>
---

以上、学習指導要領を対比させた表を見ても気づくことであるが、古典としての古文や漢文への対し方は、やはり、I甲においては浅く、I乙においては、深い理解、鑑賞を要求するものであることにまちがいはない。このことは、I甲とI乙の標準単位数にはっきりと現われている。もち論、古典I甲の標準単位数が2であるからといって、それだけにとどめておく必要はなく、3でも4でも5でも良いわけであるが、指導要領に盛り込まれた学習目標、内容、指導を達成しようとする場合は、そこまで単位を増加させる必要はなさそうである。やはり、古典I乙の学習達成度にして5ないし6単位が標準単位数として必要になるわけである。

さて、古典I甲と古典I乙の相違を認めた上で、本校の古典学習の体系はどのように組まれるか。

### 3 本校における古典学習の体系

#### 1) 国語科カリキュラム

現段階において本校で学習している国語科のカリキュラムは次のようである。

	標準	履修	1 年	2 年	3 年
	単位数	単位数			
現代国語	7	7	3	2	2
古典 乙 I	5	6	古文 2 漢文 1	古文 2 漢文 1	
古典 乙 II	3	3			古文 2 漢文 1

そして新しく改定された指導要領のもとに発足する48年度からの時間配当は、上記のものと全く変わらないといってよい。即ち次のごとくである。

	標準	履修	1 年	2 年	3 年
	単位数	単位数			
現代国語	7	7	3	2	2
古典 I 乙	5	6	古文 2 漢文 1	古文 2 漢文 1	
古典 II	3	3			古文 2 漢文 1

このカリキュラムを編成するには次のような条件を考慮に入れた。

- 1 100%近くの生徒が国立大学進学を希望している。
- 2 大学進学希望者の内、3分の2は理系、3分の1は文系の志望者比となる場合がほとんどであるが、文系、理系によって国語の学習に差異があるべきでない。

#### 3 教官構成

古典I乙に増加単位を設けたのは、古文を学習する基礎段階において文語のきまりを身につける学習を効果的にすることをねらったものであり、さらに古典IIの目標2「精選された作品を深く味わう」ということが今回の改訂の大きな一つの焦点である以上、かなり自由に古文を読みこなせる力を修得させようとするのをねらったものである。

## 2) 古典I乙の中の古文の展開について

本校において古典I乙の単位数は6そのうち、古文に割り当てられるのは4であるが、現課程よりも程度を高めた学習が可能なのではなかろうか。即ち先述のごとく新課程に基づき中学校においては、古典に触れ、親しむ機会が多くなっているから古典学習への導入が容易になるからである。「読むこと」の分野に入れられた中学校古典は「読む」という点では目標を達成させてくれるであろう。それに反して、文語文法や文学史の学習はなされていない。従って本校では、まとまった文語文法の学習を入門段階で行ないたい。

今まで本校では、教科書のみにとらわれず広く副教材を求め、より速くより多く読むことによって古文に習熟する学習を行なって来た。例えば「お伽草子」中の「一寸法師」「文正菓子」「磯崎」「福富草子」,「酒吞童子」さらに「折たく柴木」「大鏡」などであるが、このような丸本速読学習は、今後ますます取り入れ易くなったようである。「心情を豊かにし」、「文化の特質」にふれるという目標により近づけるわけである。

古典I乙古文の授業の年間計画は、かりにある一つの教科書があったとした場合、副教材とどうかみ合わせて行くかを次の表によって示して見たい。

年間、ほぼ32週間の授業をするものとして考えることにする。

### 1年 古典I乙 古文 年間授業概要

		教科書教材	副教材
一 学 期	1	一、古文入門	<ul style="list-style-type: none"> <li>。「古典文法の学習」 西日本書房 (1学期中使用)</li> <li>。「竹取物語」 岩波文庫 五人の貴公子の話のうち 二話</li> </ul>
	2	安養の尼の小袖—十訓抄	
	3	ちごのそら寝 宇治拾遺物語 良峰宗貞の出家 今昔物語集	
	4	二、物 語	
	5	もと光る竹 竹取物語	
	6	かぐや姫の昇天 竹取物語	
	7		
	8		
	9	都鳥 伊勢物語	
	10	筒井筒 “	
	11		
	12	三、戦記物語、祇園精舎	
	13	木曾の最期	
二 学 期	14	四 随 筆	<ul style="list-style-type: none"> <li>。「徒然草」 初音書房 教科書で扱ったもの以外を読む</li> </ul>
	15	つれづれなるままに	
	16	仁和寺にある法師	
	17	花は盛りに	
	18	能をつかんとする人	
	19	他 6 段	
	20		
	21		
	22		
	23		
	24		
	25		
	26		

三 学 期	27	五 和歌と俳句			
	28	むすびし水	古今和歌集		
	29	旅に病んで	芭蕉 蕪村 一茶		
	30				
	31				
	32				◦奈良, 大和旅行のオリエンテーション 万葉集, 古事記, 唐大和上東征伝, か げらふ日記, 更級日記, 枕草子

2年 古典I乙 古文 年間授業概要

		教科書教材	副教材
一 学 期	1	一, 上代の文学	
	2	倭建命	古事記
	3	熟田津	万葉集
	4	二, 中古の文学(←)	
	5	馬のはなむけ	土佐日記
	6	月の桂川	"
	7		
	8	五, 近世の文学	
	9	漂泊の思ひ	奥の細道
	10	白河の関	"
	11	平泉	"
	12	越後路曾良との別れ	"
	13		
二 学 期	14	二, 中古の文学(←)	
	15	正月一日は	枕草子
	16	にくきものは	"
	17	中納言参りたまひて	"
	18	五月ばかりなどに	"
	19	八月つごもり	"
	20	うれしきものは	"
	21	三, 中古の文学(←)	
	22	若紫	源氏物語
	23		
	24	花山天皇の御出家	大鏡
	25		
	26		
	三 学 期	27	信濃守藤原陣忠御坂に落ち入りたること
28		今昔物語	
29		四, 中世の文学	
30		ゆく川の流れ	方丈記
31		養和の飢饉	"
32		雪の玉水	新古今和歌集
	五, 近世の文学		
	此木戸や	去来抄	

3) 古典IIの展開について

古典I乙の目標2と, 古典IIの目標2との差異は, 結局のところ, 「作品と時代や文化との関係などがわかるようにする」(I乙)と「その作品の特質がわかるようにする」(II)とい



うところにある。

つまりⅠ乙は、作品の文化史的理解を求め、Ⅱは作品それ自体の理解を求めると言ってもよい。それ故、Ⅰ乙教材は、時代を代表する作品が選ばれざるを得ないであろうし、従来の古典乙Ⅰのように各時代の作品が小部分づつ並べられるという形になるであろう。事实在検定中の48年度からの教科書教材はそのようであると聞く。

さてⅡの場合、「作品の特質」の理解の要求は、教材が単独であることを暗示している。文部省の方針としては、各社三作品にしぼる様な指導があったと聞かすが、当然のことと思われる。従来副教材として文庫本などで使用していた方法が認められたと言うべきで3年生に、ゆっくり日本古典文学を味わせる方針には大いに賛意を表するものである。

もれ聞くとところによると、こうした三作品という範囲で取り上げられる作品は、万葉集、源氏物語、枕草子、平家物語、徒然草等があげられているという。教科書会社各社が三作品の限度で、どのような教材にしぼってくるのか、多大の興味と関心のあるところだが、ここでは別の角度からの考察をしておきたい。

「作品の特質」という言葉は、さまざまなことを想起させるが、日本文学のいかなる特質を把握させるかということ、かなりの問題がある。

例えば四季の美意識として日本文学の特質を把まえる場合、教材は、万葉集・古今集・新古今集などの四季の歌、枕草子、連歌などという系列が考えられる。また、その特質を自照性に見れば、かげろ日記、和泉式部日記、紫式部日記、建礼門院右幸大夫集などの系列、あるいはまた、王朝の宿世思想的なものとしてみれば、源氏物語、平家物語、方丈記などという線もある。更にたくましい庶民の生き方ととらえれば、説話集（王朝、中世、近世）や西鶴の作品を並べることができるだろう。

もちろん、このように特質を定めることは必ずしも必要ではなく、一作品にはそれぞれ様々の特質要素が含まれているのだが、上記のような方法での選択が古典Ⅱでは可能であることを述べておきたい。

さて、本校での最近の実験例を取り上げ、大方の批判を仰ぎたい。従来丸本を使った場合の長所は、一つの作品を断片的にではなく、継続してゆっくり味わう点にあったが、他方短所として、作品の評価やその理解の仕方の大部分を生徒にまかせっきりにする点があった。多く読めば、自ずと生徒自身に理解力が育つといった安易な面も教師の方にはあった。

そうした欠点を補う方法として、教材→（教師）→生徒という従来の方法を、教材→各時代の注釈、評論→近代の評論→（教師）→生徒とする方法を考えているのである。

はたして「作品の特質」を理解する良法であるかは、実験の域を出ないので分らないが、古典教材を痩せ細らせないための一法ではないかと考えている。

また、古典から現国への橋渡しも可能であり、いわゆる日本文化との関わり、時代との関わりもさぐることができるのではないだろうか。以下記すものはごく一部であり、こうした教材を古典Ⅱで使用するかはまだ分らないのであるが、試案として提示するものである。

なお各教材はこれまでの一流主義、健全主義、隠健主義などといった方針ばかりではなく、いわゆる人間性の躍動する、恋もあり、挫折もありといったものも大いに加えられるべきだと思われる。下表では各古典の抄出すべき細かい部分ははぶいておく。

3年古典Ⅱ年間授業計画

学期	週	時	教科書教材	副教材・備考
一 学 期	1	6	万葉集	斎藤茂吉「万葉秀歌」より
	2			高木市之助「雑草万葉」 —女性三題その三 つり橋—
	3			
	4	8	かげらふ日記	文庫本により上巻抄出
	5			
	6			
	7			
	8	6		唐木順三「日本人の心の歴史」上 —春と秋といずれもされる—) 通読 —季節のよびよせ— —秋への傾斜—
	9			
	10			
11	6	紫式部日記	秋山虔「源氏物語」 —紫式部と源氏物語—	
12				
13				
二 学 期	14	18	源氏物語	「無名草子」—源氏物語— 本居宣長「源氏物語玉の小櫛」 秋山虔「源氏物語」 (夏休み中に通読指示)
	15			
	16			
	17			
	18			
	19			
	20			
	21			
	22			
	23	8	建礼門院右京大夫集	「平家物語」灌頂の巻 源信「往生要集」 —厭離穢土—抄出 梅原猛「地獄の思想」
24				
25				
26				
三 学 期	27	7	お伽草子 —一寸法師— —物ぐさ太郎—	佐竹昭広「下剋上の文学」 —成りあがり—
	28			
	29			
	30	3		3 日本文学史
	31			
	32			

4) 古典の中での漢文学習の展開について

古典Ⅰ乙のなかで漢文の占める単位数は2単位、古典Ⅱではおよそ1単位であろうと考えられるから、高校3年間における漢文の学習時間は大体毎学年週1時間と考えて良い。その時間の中でどんな教材をどんなふうに配列するかということはおのずからきまってくると言えよう。ことに今回の改訂の基本になっている考えかたとして、精選された作品ということがあるから、Ⅰ甲のみでなくⅠ乙でもあまり新奇な教材が入ることは考えられない。配列には少しく差が出るにしても、易から難の方向も当然であろう。

教材を単元別に整理して見れば、単位数は14~10、単元毎にあてられる時間数は基本的には

7～5ということになる。もちろん、単元により、その重要度には差があるから、たとえば、入門単元では必ずしもこの時間割当てすませなければならないというのではない。

そこで漢文の教材を通観して、高校三年間の発達を併せて考えるとき、根底となるものはなにかと考える。

- 漢文入門
- 史話史伝
- 詩一（唐詩を中心として）
- 文章（散文）
- 思想（儒・道その他）
- 日本文学との関連
- 中国 { 文学の流れ  
          思想

以上の事項であろう。このうちの文学史、思想史は、中国と日本との関連において扱われることを意味する。こう考えてくると単元数の異同はもとより問題ではなく、訓点を施した作品を読むことになれること、そして教材はできるかぎり読み易くしてあること、次に以上の各面で各種の作品が展開すること、が要点である。現実の生徒に接している経験から言えば、文語文法の規則に従って訓読することになれるということはまあ期待できないであろう。その理由の一半は年々平易化する教材の表記法にあらう。しかし、内容には並ならぬ興味を示す者が多いから、漢文の存在意義は否定できない。その点についてわたくしは次のように考える。

上記の目標を、まがりなりにでも2年間にやって見よう。多少かけ足でも良いではないか。そしてそのあとにくる古典Ⅱの漢文では生徒の必要性を根本として作品を選択して見よう。もちろん、教師側の示唆も必要である。例えば、郷土の教材である。これは各地の墓碑銘などが考えられ、また紀行文があらう。あるいは国文で書かれた思想的隨筆（江戸期のもの）が考えられる。わたくしの考では新しく発行されるⅠ乙の教科書の発展を重視して、古典Ⅱの教材を自由に活かしてゆきたい。そのために、Ⅰ乙に時折帰っても良い。Ⅰ乙で学んだことがたしかに活用される教材を先人の作品から見つけてゆきたいのである。

### 1年 古典Ⅰ乙 漢文 年間授業計画

		教科書教材	補助教材
一 学 期	1	1 漢文入門	漢文入門用の短文、旬例集 (市販のものか、自製プリント)
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		
	11	2 唐詩 (→)	
	12		
	13		

二 学 期	14	3 史 話 十八史略より 3篇	中国史の入門的解説書  (黄河の水)等を休暇中によませしておく  寓話の短いものを補充する
	15		
	16		
	17		
	18		
	19		
	20	4 古小説 桃花源記 枕中記	
	21		
	22		
	23	5 唐代散文 雜 説 捕蛇者説	
24			
25			
26			
三 学 期	27	6 論語と孟子	
	28		
	29		
	30		
	31		
	32		

2年 古典I乙 漢文 年間授業計画

		教 科 書	補 助 教 材
一 学 期	1	1 古代の詩文 詩 經 文 選 漁父辞 2 史 話 史記より(漢楚の興亡)	
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		
	11		
	12		
	13		
二 学 期	14	3 六朝の詩文  4 李白と杜甫  5 白居易	新潮文庫(陶淵明伝) 参考
	15		
	16		
	17		
	18		
	19		
	20		
	21		
	22		
	23		
	24		

	25		
	26		
三 学 期	27	6 諸子の思想	岩波新書（諸子百家） 参考
	28		
	29		
	30		
	31		
	32		

3年 古典 II (又は古典 I 乙)

		教科書教材	補助教材
一 学 期	1	1 宋代の詩文  赤壁賦をふくむ	名家紀行文
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		
	11		
	12		
	13		
二 学 期	14	2 長恨歌  3 近世以後の漢学 (江戸文学史の一部として)	源氏(桐壺)の一部  鷗外、漱石と漢文学の関連を示す。作品又は 個所を引く。
	15		
	16		
	17		
	18		
	19		
	20		
	21		
	22		
	23		
	24		
	25		
	26		
	三 学 期		
28			
29			
30			
31			
32			